



〈歌・小説・日本語〉 32

ソープ百人一首

勝又浩

本名を履歴書の中に閉じ込めて

今日からわたし「泡姫女優」

なにげなく客の髪の毛触れる瞬間

美容師の夢ふとよみがえる

気がつけば異人となりて肉体張る

われはフアッション・プロレタリ

アート

前回までの鎌倉將軍の歌とはがらりと変わって、これは現代の新宿、池袋あたりの尖端風俗の歌である。何をやっているのだと言われそうだが、弁明すれば歌の始まり、万葉集には宮廷人の優雅な恋歌もあるが、あわせて関東の田舎の祭り歌、歌垣なんかも含まれていたわけだ。それが短歌の伝統、つまり時空を超えてどこにでも自由に遅しく、雑草のごとく育つのが、わが民族歌の本来の生命なのだろう。

村上龍より二歳上になるが、まさに時代が彼をつくり彼が時代を表現したのだ。前記「ソープ百人一首」などはそんな体験から生まれた稀有な試みである。後書きには、この百人一首は自分の「現代娼婦論」だとも書いている。むしろ彼の風俗探訪関連の著作はたくさんあるし、それと一体だったアングラ演劇沈湎生活のなから、後には特異な寺山修司論である『私は寺山修司・考 桃色篇』（れんが書房）を出している。

しかし伊藤裕作が変わっているのはそれだけではない。こうした生活の果てに突然、大学院に進学したのである。法政大学大学院の国際日本学に社会人入学したのだが、そこで選んだ研究テーマは日本近代の娼婦小説の歴史、さらに戦後の「売春防止法」以後の性風俗とそれを反映した文学作品との関係である。自分が惚れ込んで住んでもいる世界を、もう一つ日本の文化全体のなかで位置づけておきたかったのである。これは修士論文としてまとめら

とは、少し大仰な言い分になったが、

実を言えば最近、友人伊藤裕作から一冊の文庫本、『風俗のミカタ 1968—2018』（人間社文庫）を贈られて、これが面白かったのでぜひこの欄で紹介しておこうと思ったのが事の始まり。飛び入りの番外編でお許し願いたい。

ここに引いたのは、その文庫本に再録されている伊藤裕作の旧歌集『シャボン玉伝説』（昭和63年刊）中の「ソープ百人一首」からの三首である。まあ比較的穏やかな歌を採ったが、全体はなかなか異風過激、私の力ではおそれとは捌ききれない。作者の弁によれば、俵万智『サラダ記念日』の出現に触発されて、それなら自分がいつも接している、いわゆるソープ嬢たちの歌もあつてよいだろうと試みたのだと

れ、後に『娼婦学ノート』（データハウス）として刊行されたが、私とはそのとき以来の付き合いである。いわゆる赤線の廃止が日本の歴史ある「性文化」を壊し、とめどもない「性産業」を生んで拡散させ、プロでない娼婦をたくさん作り上げる結果になった。こんな性風俗の戦後史を、私は彼からどれほど教わったかしかない。今度の新著には「極私的風俗50年の記録」なる副題が付いているが、この本の主筋は、彼自身の体験的战後性風俗史である。

話を短歌に戻すと、これも寺山修司の影響のうちであるが、伊藤裕作は在学中「早大短歌会」に属して歌も詠んでいた。従って俵万智は大学の先輩になるわけだが、そこから『サラダ記念日』に触発されて、という反応も生まれたわけだ。他にも少し先輩に福島泰樹や三枝昂之がいて、指導を受けるような場面もあったという。しかし『シャボン玉伝説』以後歌から離れていたが、最近になってまた復活、故郷の三重短歌会で選者賞を受けたという便り

いう。百人のソープ嬢が己の生活と心情を一首ずつ吐き出すように詠んだという趣向である。百首歌はさまざまあるが、ソープ嬢百人一首とはまず前代未聞、他に例がないだろう。

こんなことをやった伊藤裕作は、同書の「平成歌篇」に、

「家を出ろ」寺山修司の呼びかけ
に1968われ東京へ

の一首があるように、寺山修司に取り憑かれて十八歳のとき上京、早稲田大学の、それも寺山修司と同じ教育学部に入ったが、以後アルバイトも含めて寺山の世界にとっぷりと浸かって、「天井桟敷」を初めアングラ芝居などに入れあげる生活だった。「寺山のすることは何でもしてみよう」というのだから、その憑かれよう、ほれ込みようが知れる。そのあげく卒業後はフリーの風俗ルポライターとなった。

思うに、彼の活動した一九七〇から八〇年代は高度経済成長の真つ盛りでもあつて、その波に乗った性風俗業界も大躍進の時代だったのだろう。彼は

もあつた。先に一首を示したように本書にも「平成歌篇」があるが、そこからもう一首を引けば、

都鄙の地を「ひかり」に乗って往還す 老いて阿弥陀に出会いしわれは

の近況歌がある。現在の彼はテント劇団「水族館劇場」の一員となって各地での野外劇に出演しているが、一座を故郷津市に引っ張って行って古い寺の境内で興行、そんな村おこしの働きが認められて、賞金のない斎藤緑雨文化賞を与えられたりした。

しかし、もっとびっくりするのは、そういう合間に出家して浄土真宗の僧侶の資格まで取ったことである。寺山修司がとうとう一人の僧侶を生んだかと思うと可笑しいが、たくさんのマグダラのマリアたちを追いかけるうちにとうとう出家まですることになった彼の生き方には私は感動している。思うに、伊藤裕作のこの一点だけは師・寺山修司から外れた、あるいは越えたのではないだろうか。



〔歌・小説・日本語〕
寺山修司と伊藤裕作 勝又浩

売りにゆく柱時計がふいに鳴る
横抱きにして枯野ゆくととき
たったひとつの嫁入り道具の仏壇
を義眼のうつるまで磨くなり
かくれんぼ鬼とかれざるまま老い
て誰をさがしにくる村祭り

寺山修司の第三歌集『田園に死す』中の三首である。嫁入り道具に仏壇とはちよつとあり得ないことだが、そこには何か普通ではない事情があったのだろうと想像するしかない。歌にも演劇にも、寺山修司の世界にはこういう分からなさがたくさんある。あるいは、こんな不条理が基本になっていると言すべきか。

前回は伊藤裕作の特異な歌と仕事、またその生き方について紹介したが、そこに名を挙げておいた彼の寺山修司

論がその後文庫版になって、タイトルも『寺山修司という生き方 望郷篇』（平成30年、人間社文庫）と改められた。それを拾い読みしていると右の寺山短歌が引用されていて、こういう選択もあるかと思つた次第。

ちなみに記しておく、この文庫版は親本にはない高取英（劇作家、劇団「月蝕歌劇団」）の「解説」のほかに本文では「伊藤裕作という生き方」なる一章を付け加えているが、そこには「ハーフタイン」と称して還暦を機に故郷への恩返し、「芸濃町」の町興しのためにいろいろ働いている著者の姿が見えている。そんなところを読みながら私は、本人が口癖のように言う、かつて寺山修司に「煽られて」故郷を棄てた少年が、今度は寺山修司を連れての里

帰りだなと思つた。「天井桟敷」ではないが、その流れをくむさまざまな演劇集団を次々と村に連れて行き興行を実現しているからだ。なかではいまだにテント公演を守る「水族館劇場」に、江戸川乱歩の『パノマラ島奇譚』にまつわる村の歴史を絡めた新しいドラマ『この世のような夢』を作らせ、演じさせて、まるで彼自身が寺山修司となつて東京を、そのアンダーグラウンド文化を、故郷の村にドカンと据えたという趣きである。

話を寺山修司の歌に戻すと、私などが寺山短歌として印象にとどめているのは、たとえば初期の、

チェホフ祭のビラのはられし林檎
の木かすかに揺るる汽車過ぐるた
び

かわきたる桶に肥料を満たすとき
黒人悲歌は大地に沈む

アカハタ売るわれを夏蝶越えゆけ
り母は故郷の田を打ちていむ

といったところ。友人に教えられて初めて読んだときの驚きを今も思い出

す。一首のなかの思いがけない展開とか飛躍といったかたち自体は珍しくないが、ここでは、詠われている背景世界と、詠われていることがらとの一種の落差、ギャップがいかに新鮮であったし、そうしたなかに瑞々しい抒情があつて唸らせる思いだった。しかし、これだけの例でも、冒頭に示した、後の三首との大きな違いは明瞭だろう。冒頭の三首は、既に〈東京〉での反応を知り尽くしたうえで、〈津軽〉の強烈なパフォーマンスを演じてみせている、と言つたらよいだろうか。

伊藤裕作によれば、寺山修司歌集『田園に死す』（昭和40年）の世界は同題の映画（昭和49年）に具現化されて評判になったが、彼から見ると『田園に死す』の傾向は映画以前、天井桟敷芝居『犬神』（昭和44年）に既に現われていた、ということになる。寺山演劇を全てというほど観ていた彼からすれば、映画で騒ぐ人たちの認識不足が歯がゆかつたのであろう。

しかし、寺山短歌も芝居も伊藤裕作

のようには入れ込むことのなかつた私から見ると、次のような側面もあるのではないかと思われる——寺山修司という人は、〈津軽〉に次々と押し寄せてくる〈東京〉を鋭く捉え、巧みに表わすところから始まつたが、それが、詳細には分からないが、あるとき逆転して、〈東京〉に〈津軽〉を持ち込み、突き付けてみせる、そういうゲリラ的カルチャー革命を企てた、そういう人だつた、と。伊藤裕作の言う、寺山修司の「近代と前近代の混合」という性格は、見方を変えればカルチャーとしての東京と地方の攪拌であつたろうし、全国の若者を惹き付けた「書を捨てよ、町へ出よう」という呼びかけも、書Ⅱ東京から来るものを黙って受け入れるばかりでなく、自分の生い育つた土着文化を積極的に東京に持って行け、という意味でもあるだろう。

こんなところが、歌は一通り読んだけれど芝居は数えるほどしか観なかつた、その程度の寺山読者であつた私の率直な感想である。親しかつた批評家

小笠原賢二が寺山修司を熱心に語つていた時期があつたが、話を聞きながら、私には何となくそこまで付いては行けなかつたことなど思い出す。いま改めて考えてみれば、〈津軽〉に在つた寺山修司には大いに撃たれ、共感もしたが、〈東京〉で〈津軽〉を演じている寺山修司にはあまり興味が持てなかつたということになるうか。

そんな距離を持ちながらも、今は寺山修司を連れて故郷へ「ハーフタイン」する伊藤裕作の仕事面白く見ている。彼のような人たちがいて、寺山修司も一回転して二十一世紀に入ったのかもれない。

さて、今回の締めくくりは前記「望郷篇」に収められている、伊藤裕作の近作短歌としよう。

葬列の如く夕陽に向かう団塊「夜明けは近い」を歌いし我ら

四拾七歳寺山修司この世去り六拾七歳いま我 あの世見ている

この世では産土神に守られて弥陀の光に乗つてあの世へ



浅沼璞『塗中録』の不意打ち

勝又浩

浅沼璞が初めての句文集だという『塗中録』（左右社）を贈ってくれたが、読んでさまざまな刺激を受けたので今回はそれを中心に書いておきたい。

まず、俳句作品と交互に配置されたタイトルのない六編の短文がなかなか魅力的で、これが私にはこの著者についての新発見だった。それらは、たくさんある彼の俳句評論関係の文章、『可能性としての連句』（平成8年）や『西鶴という方法』（同15年）等々では気づかなかった彼のもう一つの顔なのだろう。句文集という、今では珍しい衣裳が彼の別の姿を見せることになったのかもしれない。それにしても、俳文と一体になった句文集という形は他に見た覚えがない。近代では正岡子規などが盛んに実践奨励したが、それを受け継いだ高浜虚子以後は廃れてしまっ

たのだろうと思っていた。それが令和の時代になってからの出現で、まったく不意打ちだった。いろいろ遊び心のあふ著者のことだから、ここでも反時代的な挑戦をしてみせたのだろう。

あまり注意されないことだが、西洋のエッセイとは根本的に性格の違う、そしてエッセイよりもはるかに由来の古い日本の随筆の伝統がある。これがやはり日本近代文学の特異な小説スタイルである私小説とも深く関わるわけだ。そんなことがいつも頭の隅にある私には俳文についてもひとつの思い入があつて、それは端的には夏目漱石の『草枕』のことだ。

漱石は英文学研究によって培われた西洋流な文学観念と、漢文や俳句によって身につけた東洋式日本式な文学観との違いに悩んだが、そうしたなかか

な作品も収録されている。
何に此の師走の市にゆくからす
ビルの傾斜に学ぶ冬麗
軽暖の日かげよし且つ日向よし
核のたまさか風香る肘

ご覧のように五七七七七、まぎれもなく短歌形式になっているが、むしろ漢語などが混じることからも分かるように歌ではない。初めの上の句は元禄の芭蕉、それに下の句を継いでいるのは昭和の璞、つまり著者というわけである。もう一例を引いてみよう。

御田植や神と君との道の者
核を手挟む畔の薫風
武蔵野や鳥啼いて二日月細し
魚の泪の揺らぐ萩原

上の句の前者は西鶴、後者は子規である。こちらは切れ字「や」が入るから上の句が俳句、発句だとは分かりやすいかもしれない。しかしこれらを、たとえば外国人、あるいは短歌は五七七七の三十一文字だと教わったばかりの日本の中学生たちに見せたらどうだろうかと、私は想像してしまう。これらは短歌ではないよ、元来の俳句に七七の脇句を付けたのだよ、連句の始まりさ、と言ったら彼らは何と言うだ

ろう。では短歌とは一体何なのか、短歌と俳句の違いはどこにあるのかと反問されるだろう。俳人たちが歌人たちはそれに明確に答えられるのだろうか。こんな素朴な疑問のなかで私はやはり日本語の拍、五七五というリズムの力のことを考えてしまう。以前、「偶然短歌」という本に驚いて紹介したことがあつたが（第4回）、インターネット上に公開されている、いわば実用的な文章を片端から数えてみると、自然に短歌になっているものが相当な数あつたという統計である。この本は俳句については何も言っていなかったが、おそらく、「偶然俳句」などはありすぎて逆に意味をなさないのである。「この崖に上るべからず警視庁」という立札を例文にあげている文章論を読んだことがあつたが、そのくらい日本語は何でもかんでも五七か七五の組み合わせになつてしまふのだ。

なぜそうなのか。そのことも「三拍子言語と四拍子言語」（第3回）で述べた。要するに日本語が全て母音終りの音節構造を持つ、そして二音三音の語が圧倒的に多いという基本的性格によるのだ。四音五音に息入れの一拍を

ら『草枕』のような特異な小説を創りあげた。それは自ら「俳句的小説」と言ったように、一面では俳文の延長であり、半面では西洋小説の俳諧的な取り込みだった。『草枕』は当時大評判となつて、作品の載つた雑誌「新小説」は広告が出る前に売り切れたと伝えられているが、これが機縁となつて彼が職業作家に転じたのも事実だ。しかしどういうわけか漱石はこれ一作だけで『草枕』のような小説は書かなくなつてしまふ。そうして新聞ではまるで「金色夜叉」（尾崎紅葉）のお色直しのような「虞美人草」の作者に転身してしまつた。むしろこれはこれでまた別の大人気を博すのだが、「俳句的小説」の方はこれ以後立ち消えてしまふ。私は、その精神を継いでいるのは高浜虚子よりも川端康成の掌の小説や梶井基次郎の散文詩的小説だと思つているが、そんなことを言う人はいままま今日に至つている。漱石が「俳句的小説」をもつと継続展開して文壇もその議論を進めていけば、日本近代文学はもう少し豊かになつたかもしれないと、私は想像している。

ところで、この『塗中録』にはこん

挟むと五七のリズムが最も安定するのだ。そうであるのに、それが詩歌のこととなると、あの犬野晋までが、「中国の詩の作法の影響」（『日本語はいかにして成立したか』）だろうなどと言っているのが国語学者たちの現状だ。門外漢の私がムキになつてこんなエッセイを書き続ける理由でもあるのだが。

そういうわけで、ということになるが、日本語の詩歌は基本的に五七の拍を外せないのだが、その組み合わせのなかで短歌俳句は典型であり、いわば王者なのだ。浅沼璞によれば七七形式の俳句を作ろうという人もいるそうだが、今は俳句、川柳、狂句、標語までが五七五形式だ。その一つの形式を、門外漢には分かりにくい内容の差で特化して、それぞれのジャンルを立て、まるでお祭りの夜店のように、それぞれの領域を守っているわけだ。先の「この崖に……」で言ってみれば、それが俳句ではないのは季語がないから、川柳でないのは人情や機知がないから、狂句でないのは滑稽やおどけがないから、標語でないのは主義も信条もないから等々と、日本文学にはそんな判別が要求されるわけだ。

High X

口 (イタナ)

子

江川

山

〈歌・小説・日本語〉③
現代の歌物語

勝又浩



前回は「句文集」という現代では珍しい形式の浅沼瑛「塗中録」(左右社)を紹介したが、この本のことを知人に話すと、短歌にはこんなものもあるよと、九螺ささら「きえもの」(新潮社)と、千葉聡「90秒の別世界」短歌のとなり物語(立東舎)の二書を教えてくれた。なるほどどちらも歌と散文の、いま言うコラボの本だった。一部では話題になったそうだが、現代短歌には疎い私には「伊勢物語」以来の伝統がこんなふうに生きているのかと面白かったので今回はその感想を記しておきたい。

まず前者「きえもの」はこんな本だ。短いものは二ページ程度、長いものでも四、五頁ほどの散文があつて、その冒頭と結尾に短歌が一首ずつ配されて

クマノノスヤ

いうのではなく、自分自身がそうなつてしまふところ、怖いようなヘンなりアリティもある。少し強調すれば二一世紀の日本版「変身」(カフカ)かもしれない。

しかし眺めているうちに、豚足になつてしまつた手でどうやって豚足の蹄を磨くのかなあ、というような疑問も湧いてくる。むしろそんな読みは反則だろうが、反則ついでに言えば、ここに引いた二首自体、これも短歌なのか、短歌って何なのかと考へてしまふ。まあ、歌舞伎が「風の谷のナウシカ」をやる時代だ、わが民族芸能も文学も二一世紀のこういう現実も容れられる、載せられるのだと、今は考へることにしようか。

それにしても、飲食物を「きえもの」と言うとは初めて聞いたが、私のような平均寿命に到達してしまつた者から見ると、流れに浮かぶ泡沫たる人間こそ「きえもの」の代表に他ならない。いつの日かこの著者もそういう「きえもの」を歌う日が来るだろう。

いる。歌と散文はセットであることに意味があつて、どちらが主でどちらがその従属物だということではないらしい。私は見ていないが、著者には同じ形式の「神様の住所」(朝日出版社)なる一書もあつて、それがドウマゴ賞を受賞しているという。こういうスタイルが評価されたのであろう。

そのセットがここには七〇編取められているが全て飲食物に関するもの。そこが「きえもの」という所以であり、芸の見せどころでもあるわけだ。「ネクター」から始まつて「羊羹」や「マカロン」、「素麺」や「コカ・コーラ」等々、タイトルを眺めるだけで微笑を誘われるのは、やはり「きえもの」の力なんでしょう。

で、その散文だが、いわゆるグルメ

もう一冊「90秒の別世界」短歌のとなりの物語」は、「きえもの」に比べれば単純明解である。引かれている歌は一話一首、それも「きえもの」が全て自作歌であつたのに対してこちらは他人の歌集から選ばれている。古いところでは与謝野晶子、石川啄木、北原白秋のような古典から、中城ふみ子、馬場あき子、尾崎左永子、あるいは寺山修司から永田和宏、俵万智等々、馴染みある名がたくさん出ているが、それも読者を惹きつける大事な要素だろう。むしろ私などの知らない現代歌人もたくさんいて、それも魅力だった。

全百話百首の構成だが、百人一首というわけではなくて、歌集は違うが重なる歌人もある。また、この初稿が連載された雑誌「短歌研究」から採られた歌があつたりと遊びもあるが、もう一つ言つておくと、作者自身は「短歌研究」新人賞で登場した人だというのが、自作歌は一つも採っていない。「きえもの」のスタイルは避けたのだろう。短詩たる歌はみな物語をはらんでい

エッセイの類ではない。これも何と云うべきか迷うが、エッセイ風ありコント風あり、SF調ありホラー調ありといった具合である。読者はその一つ一つの思いがけない展開、味や風味を楽しめばよいということになるうか。

纏足の姫は沓から足を出す二本の足は豚足である

と始まるのは「豚足」と題された一編。物語は、自分の容貌に自信がなく嫌いでさえあつたが、手の爪だけは好きで自信のあつた娘。あるとき豚足が爪を美しくすると知つて毎日食べ続けるが、半年たつた頃、手首から先が蹄に成り始めた。しかしその蹄がいとらしく、とうとう恋人とも別れ、会社も辞めて閉じこもり、毎日、豚足を食べては蹄を磨きづける。

豚足がみな手になつて整列し千手観音無音の浄土

と結末の歌になる。千手でなく千足観音像を見たことがあつて人間の想像力が可笑しかったが、豚足の千手観音というのはびっくりだ。それを拝むと

るが、それを見開き二ページのショートショートに仕立てたところが本書の特色である。尊敬する星新一に做つたと自らことわっている。81話「申込書」はこんな話だ。高等学校の進路指導室。やつてくる生徒はまず希望する大学名を書き、次に「疑似体験マシーン」を頭から被つて、書いた大学の入学後の生活を疑似体験する。それによつて迷っていた志望校の順位を決めて部屋を去る。そのマシンの、実は生徒が書類の初めに記した大学がよく映るように仕掛けてあるだけのこと、つまり生徒の意識下の願望を顕在させやるのだという。こんな話を締め括る歌は、
花開くまで世話したし 僕たちの「夢」という字は永遠に草かんむり

(田中章義「ふたりをつなぐもの」)となる。作者の機知才知が溢れていて楽しいが、あえて言えば、投げたボールが全部網に入つてしまふような、逆のもの足りなさがなくともなかつた。